



「多久から発信！SDGs」

「びわの袋掛けと収穫体験」

6月4日(火)、東原岸舎東部校5年生31人が、びわの収穫体験をしました。この活動は、食べ物大切さについて、体験を通して感じ取ってほしいという願いから、納所里づくり委員会の協力のにより、毎年取り組んでいる活動です。今年度も納所交流センター付近のびわ畑をお借りして行いました。

5年生のほとんどの子どもたちが、びわの袋掛けと収穫体験するのは初めてでした。4月の袋掛けでは、初めのうちは、なかなか思うように新聞紙で包めなくて大変そうでしたが、納所里づくり委員の方から丁寧に教わりました。だんだん慣れてきたのか、上手に新聞紙で包むことができました。

6月になって、待ちに待った収穫体験です。納所里づくり委員会の方から、びわの実の取り方を教えてもらったり、おすすめの実をいただいたりしました。ある委員の方が脚立を使ってびわの実を取っているときに「取り方がプロですね！」と子どもたちが声をかけました。収穫体験を通して「二ニュースでは今年の納所びわはとてもおいしい、と放送されていたので、家に帰ってから食べるのがとても楽しみです」と日記に書いていた友達もいました。

納所里づくり委員会の方々には、普段、子どもたちが体験できない袋掛けと収穫体験のご支援をいただき、感謝しています。今後も、食育の推進を学校と地域社会、家庭と連携して取り組んでいきます。



連載

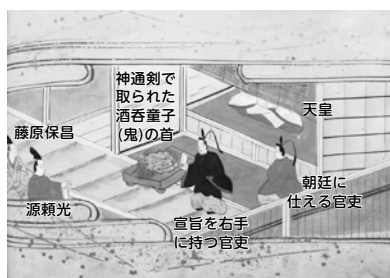
紫式部・和泉式部・小式部の物語 挿絵(4)

多久家資料『小しきふ(小式部)』を編集

『小式部(上)』挿絵4 酒吞童子の話



鬼退治に將軍2人が任命されます。首領の酒吞童子の首を献上し、天皇から褒美を受け取ります。



和泉式部の評価が高まっていた頃の話で、物語は次のように記しています。

鬼(酒吞童子)が稚児に化けて出没し、夜毎に人を食らい、都是騒然としていました。そこで、鬼を討つべく朝廷から勅が、源頼光と藤原保昌の將軍に下されました。鬼の居城は、京都西方の愛宕山と老の山(坂)の二箇所にあつたそです。源頼光は渡辺綱など武勇に優れた者を率い、藤原保昌は武者一人を連れて出発しました。酒好きなど鬼といふことで、竹筒に酒を入れ、山伏の姿をまねて、山中を三日三晩探し求め、遂に鬼の居城に到着しました。そこに美しい稚児の姿で鬼が帰つてきました。互いに酒を進め、稚児も將軍も酔い伏せてしまいました。藤原保昌が目覚めると、稚児は、頭が八つ足が九つ眼が十六の赤鬼となつていたので、赤鬼は火焔のような息を吹きかけ、剣を抜き、將軍らを捕まえようとしていました。將軍も神通剣髭切で応戦すると、鬼の剣は折れ、ついに鬼の首を打ち取りました。これも住吉明神の御加護のおかげです。都に上り、鬼の首を天皇の御目にかけました。源頼光には多くの所領を配分されました。『挿絵4』藤原保昌には「何でも望め」との宣旨があり、「畏れながら和泉式部をお与えください」と申し上げると、天皇もこれを認められ、二人は夫婦となりました。

※原本の挿絵は色絵になっています。郷土資料館に写真を掲示していますので、お立ち寄りの際にご覧ください。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

市民文芸

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

◆ それぞれに 振幅ありて 藤の花
長く短く いっせいに 揺る
川浪 信子

◆ いつもより 梅雨入り遅く あじさいの
しおれ具合が 我がに似ており
梶原恵美子

◆ 君の顔 見つめていた 本当は
君の心を見つめていた
野崎 隆幸

◆ 千鶴姫の 弾く筑紫琴 早苗田を
吹く風に乗 り山巡る
浦野 嘉恵

◆ 近き昔 賢順研究者で ありし夫の
講演聴きしを 娘となつかしむ
尾形 節子

俳句 《大石ひろ女選》

◆ 小判草 風来るたびに 光合う
武富 律子

◆ 夕昏に 思いをたくす タベかな
本村 則子

◆ 切れ長の 地蔵菩薩や 半夏生
おおやはな

◆ 夏の雨 深夜ラジオの セレナーデ
富樫 明美

◆ 奥宮に 流るる 真水 沙羅の花
大石ひろ女

川柳 《多久川柳会 互選》

◆ 砂に書き 波で消された ラブレター
松下 修

◆ 追伸に 本音が出る 紙二枚
大谷 和

◆ 土用丑 厄日となった 鰻たち
田中 正春

◆ 奈良漬の 自慢も一緒に 走り書き
小副川ヨシエ

◆ 親しみを 最期にまとも 弔辞読む
西山 残月